

氏名(本籍)	塚原伸治(千葉県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第2630号
学位授与年月日	平成25年2月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	老舗の民俗学的研究 - 家業経営における社会的拘束性と伝統 -
主査	筑波大学教授 博士(文学) 古家信平
副査	筑波大学教授 博士(文学) 徳丸亜木
副査	筑波大学教授 博士(文学) 中西僚太郎
副査	京都大学大学院 博士(文学) 風間計博 人間・環境学研究科教授

論文の内容の要旨

本論文は、民俗学における商業および商業従事者に関する研究の枠組みを提示するため、老舗の経営をとりあげ、さらに「伝統」に関する議論にも新たな視点を提示することをめざしている。

序論では従来、民俗学において経済活動に従事する人々を「道徳的な人々」「経済合理的な人々」のいずれかとして理解してきたことを指摘した。それが民俗学的人間観の影響を受けたものであること、議論が二者択一に陥ることの問題点が明らかにされ、それらのいずれかを前提とせずに人々が両者の間を揺れるものと理解し、その揺れ方を明らかにすることを課題とする、と述べる。課題を具体的に検討するため、千葉県香取市佐原、滋賀県近江八幡市八幡、福岡県柳川市柳川の3か所で商家の調査を行った。

第1章「伝統的商慣行とダンナ衆の近代-千葉県香取市佐原の事例-」では、香取市佐原ではダンナ衆と呼ばれる社会集団によってマチの政治が動かされてきたという歴史を持つことから、商家のうちのダンナ衆の勢力の盛衰、売り手と顧客の関係を継続性のあるものとする要因、祭礼時の商取引の特徴、という3つのトピックについて近現代の変化を扱った。ここでは「道徳的」「経済合理的」という経済活動にかかわる人々にみられる対極的性格が、信用取引を主な取引形態とする老舗においては一致しうる、とまず指摘する。しかし、昭和初期以降においてはその間にずれが生じている。それは社会関係が急速に変化するのに対して、行動を律する参照枠と理解されている道徳や社会規範の方は変化しにくいためである。そして「道徳的」であることや規範に従うことは、伝統的であることとほぼ同義となる。道徳や社会規範は明文化されず制裁も伴わないため、伝統的振る舞いもそれぞれの商人が社会の求めるものを想像したうえで選ばれたものと理解でき、そのような形で、道徳や社会規範は拘束性を発揮する、と指摘する。

第2章「新たな経営の芽生えと葛藤-滋賀県近江八幡市八幡の事例-」では、近江八幡市八幡が近世以来今日に至るまで江戸(東京)、京都、大阪や全国の主要地方都市など広域にわたり家業を展開する近江商人を輩出してきており、家(店)ごとの独立性が非常に高いことに鑑み、4つの商家に焦点を当てる。そこで家業の継承、家訓、家例をまとめ、企業化や事業継承についての葛藤を記述し、以下の点を明らかにした。4つの商家は西洋近代的な企業概念の導入により家と経営体を分離する方向に進み、この動きそのものは合

理的である一方、これとは逆に家と経営を結びつける力も働いていた。これはマーケティング上の効果を狙う部分もあるが、当事者たちの内面からの要求でもある。単純化すれば、家と経営を分離する方向を「経済合理的」、両者をつなぎとめていく方向を「道徳的」と見ることができる。しかし、「分離すなわち経済合理的」「統合すなわち道徳的」と断じてしまうことは出来ない。実際には分離と経済合理的、統合と道徳的というようには一致しない可能性があり、こうした思うに任せない部分が、経営者たちに不確実性をもたらすのである。本章では方法論的個人主義が示してきたような、個人のライフヒストリーや家の歴史の個別性に着目するような手段でアプローチする民俗誌の叙述も試みられている。

第3章「流動する家業と「伝統」への指向－福岡県柳川市柳川の事例－」では、柳川市柳川の商家が新しい歴史しか持っておらず、超世代的な歴史の蓄積に依存するというよりも日々積み重ねられる実践とそれに伴う地位の上昇下降が問題になることに注目する。社会的地位の向上のための行為、伝統的商慣行、店の歴史を語る行為について次のように論じる。柳川においては商家の浮沈が激しく、商売上の戦略の道具として家の歴史や伝統を語り直す行為が顕著である。他の2地域においては「道徳的」方向性と、「経済合理的」方向性の分離が不可抗力的に生じていたことと対比すると、柳川には歴史や伝統を可塑的なものとして戦略的に活用することで、言いかえれば家の歴史を都合よく創り出すことによって、より積極的に両者を重ね合わせていくものといえる。ところが、伝統に接近することは不確実性を伴う。彼らは伝統を活用すればいいことは分かっているが、意図どおりに動くかどうかは世間の動向にゆだねられており、可塑的であるからこそ確信が持てず、さらには可塑性に拘束されてしまうのである。このように「道徳的」方向と「経済合理的」方向の一致は理想でしかなく、揺らぎは解消されないのである。本章では「生きる方法」を標榜してきた民俗学の一つの潮流が重視する参与観察の方法を活用した叙述を試みている。

結論では、第1に「揺らぎ」という視点の重要性を指摘する。「道徳的」「経済合理的」のいずれか一方を前提としたり、混淆を前提とするのではなく、その間で揺らぐものとして考えることで、経営の実態をより明らかにすることができる。特に、この視点は共時的な実践の検討に加えて歴史的な動態を理解するために有用な枠組みといえる。なぜ、揺らぎが生じるかという点については、2つの方向性が対極にあって対立するのではなく、当事者にとっても二者択一と見るべきではないのであり、社会的拘束性が実際の社会関係とはずれる形で作用したり、可視的でないものであったりすることがその要因であることを指摘する。

第2に揺らぎの一つの要因である「社会的拘束性」の重要性を指摘する。道徳や規範などの拘束性は歴史との関連で作用するものであり伝統としてあらわれる。社会的拘束性が働くということは、伝統が力を発揮していることになるが、伝統は歴史的事実そのものではない。伝統は現在の文脈で理解されたもの、あるいは積極的に創出されたものだった。その意味で伝統は可塑的なものである。しかし、伝統が働き掛けてくる拘束性から自由になることはできない。この拘束性は多くの場合、実体としての社会の人間関係や秩序の維持とは直接的に結び付かないものである。さらに、この社会的拘束性を発揮する主体は、実体としての社会ではなく、「想像された全体」といえるものである。社会的拘束性は曖昧で姿をとらえにくいものにも見えるが、これによって拘束性が脆弱であるとは言えない。

本稿で明らかにしたのは、老舗の経営が伝統に沿いつつも、想像された全体に対して訴えることによってしか成立しえない事実であった。訴えかける相手が想像された全体でしかないという状況によって、商人たちは不確実性の中であって選択を余儀なくされていたのである。

本論文ではこのようにとらえられる社会的拘束性を「やわらかい拘束性」と命名した。これは所与のものとして外在しているのではなく、人々の操作が可能な半面、それ自体が人々に働きかけてくるのである。

審査の結果の要旨

本論文は民俗学においては比較的手薄であった生業研究の分野の中の商家に関するもので、方法論としては福田アジオ、岩本通弥、島村恭則らの方法的個人主義と集団主義に関する議論を踏まえたものである。商家の経営については商学、経営学においても研究が蓄積されているが、本論文は道德性と経済合理性という観点をもって資料の分析を行い、祭礼の際の振る舞いや家の由緒といった具体例を検討して、先行研究に見られなかった指摘を行っている。3か所の事例研究は商家の置かれた背景の違いを網羅できるようにフィールドの特性が配慮されており、結論の一般化が説得力を持って行えた。ただ、商家の人々の判断は商取引のみでなされるものではなく、イエのあり方に関する検討が不十分である。話者の語りを積極的に用いており、そうした発話を引き出した執筆者の力量を示すものではあるが、代表性を担保するための背景説明を十分にすべきところが散見される。「道德的」の語はモラルエコノミー論を念頭に置いているが、日本語の持つ道德の多様なニュアンスを勘案すると、この用語が適切であるか疑問がもたれる。こうした不十分な点はいくつか認められるものの、本論文は学界に大きな刺激を与え、この分野の進展に寄与するものであることは疑いない。

平成24年11月22日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究所論文審査等実施細則」第10条(1)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。